
GX もう1人の主人公

尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G X もう1人の主人公

【Nコード】

N 8 0 7 9 Y

【作者名】

尚

【あらすじ】

G Xの主人公は十代、だがG Xの中にもう一人主人公がいたら？とゆう感じの話です。

作者がまだまだ未熟です。

G Xですがシンクロ、エクシーズあります。

ここから始まるオレのストーリー（前書き）

初投稿です。

しつもんがあります。

アンケートはどのようにとるのですか？

では、始まります。

楽しんでみて行って下さい

ここから始まるオレのストーリー

南海の孤島に浮かぶ島、デュエルアカデミア。ここでは日々デュエリストを目指すものが努力を続けていた。

この話はGXの世界にもし、ストーリーに大きく関わる人たちがいたら、そんな話。

デュエルアカデミア試験会場。

オレは受付で自分の受験番号と名前を告げる。

「受験番号19青柳あおやぎ 尚なおです。」

「エート・・・はい、いいですよ入ってください。」

受付の男がそう告げる。

オレは会場に入ると近くに会った椅子に腰かける

「もう少し早く来ればよかったな・・・。」

オレはそうつぶやく。実際今デュエルをしているのは25、24、23、21、20番だ。5人ずつデュエルしていくみたいだな。

「よ！ひさしぶり！-！」

オレの横で、そうやってきたのは加賀かが 竜太りゅうた、相変わらず暑苦しい奴だな。

「ああ、久しぶりだな。もうデュエルは終わったのかい？」

オレはそう尋ねる。

「ん？ああおれは26番だからな。そうゆうおまえはどんなんだ？！」

「おれか？おれは・「19、18、17、16、15番はステージへ！」お！ま、俺の勝利を祈っててくれよ。」

オレはステージに上る。

「受験番号19番青柳尚です、よろしく。」

「ああ」

「「デュエル」」

「先行は俺ですね。ドロー！カードを2枚セット、魔導戦士ブレイカーを召喚さらに魔法族の里を発動！」

周りが美しい森に包まれた里に変わる。

「俺のフィールドに魔法使い族がいる限り先生は魔法を発動できません。」

「ほう・・・面白い効果だな。」

かなりいい手札だ、ただ・・・

「この手札だとまだ私の出番はありませんね、マスター。」

オレの隣で氷の女王が話しかけてくる。名前は玲奈^{れな}、カードの精霊

だ。

気取った喋り方をしているが、かなりオツチヨコチヨイだ。

「しょうがないだろ手札に来てないんだから。」

「そうです、キャ！」

ほら何もないところで転んだ。

「どうした？ターンエンドか？」

「あ、はい」

「そうか、私のターンドロ！私は手札よりブラットウォルスを召喚！・魔法カードは使えないか・行くぞ！ブラットウォルスでアツタク！一本切り！」

「ネーミングセンスないな！伏せカードオープン！デイメンションマジック！オレはブレイカーをリリースし、手札からサイバネティック・マジシャンを特殊召喚！さらにブラットウォルスを破壊！」

「くっ！カードをセツト、ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロ！よし！ジェスター・コンフィを特殊召喚！さらにサイバネティック・マジシャンの効果発動！手札を1枚捨てジェスター・コンフィの攻撃力を2000にする！終わりです。2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「ぐわーーーー！！！！」 L P O

オレは自分の右腕を空に振り上げる。

「オレの勝ちです」

「ああ、いいデュエルだったよ。今度は試験用デッキではなく私のデッキとデュエルしてほしいもんだな」

そういった先生に俺はこう答えた。

「のぞむところです。」

その後デュエルが終わった俺は加賀と喋ったり、玲奈と喋ったり、デュエルを見たりした。1番のデュエルが終わり、これで終わりかな？と思ったらデュエルが始まった。1ターン目に攻撃力3000は驚いた。でも、結局受験生が勝った。おっ！今勝ったやつが階段を上ってくるぞ。

「おーい」

「ん？どうした」

「お前強いな、攻撃力3000を倒すなんて。」
オレがそうゆうとあいつはこう言った

「そうか？照れるな――！」

「けど俺より強いかどうかは分からないな」

「へーそんなに自信があるのか」

「ああ、まあな」

「だったらデュエルで決着をつけようぜ！」

オレもそれがいいと思う。

「あなたが尚に勝てるわけないでしょ！」

オレの横から玲奈が出で来る。聞こえない・

「うお！氷の女王！？」

エー、その反応もしかして見えてんの？

「玲奈の事が見えんのか？」

「ああ、おれも持つてるんだよ、ほらハネクリボー。」

驚いた、玲奈以外にもいたんだ、精霊。

「ま、いいや、話を戻すぜ！デュエルだ！」

やりたいのは、やまやまなんだが・

「今日はお互い自己紹介だけにしようぜ。オレの名前は青柳尚。」
ほんとにやりたいんだけどね。

「んー？そうか…、しょうがねえ！俺の名前は遊城 十代！」

十代は不満そうだったが、まあいいだろ。

「これからよろしくな十代！」

オレはそう言って手をさしのべる。十代は俺が差し出した手を握り。

「ああ！よろしくな！」

ああ、全く、楽しい学校生活になりそうだな。

ここから始まるオレのストーリー（後書き）

さいごまで観て行って下さりありがとうございました。

前書きや後書きを作者の駄文（笑）でうめるのも、もったいないので何かやりたいと思っています。

V S 万丈目の取り巻き（前書き）

どうも、前の話に描いたとおり次の話から前書きで遊戯王の、アニメでやっているような今回の最強カードをやりたいと思います。

V S 万丈目の取り巻き

朝、俺の家のポストに合格通知が入っていて、おれは飛び跳ねた。その後家族や、近所の人などに合格したことを伝え、りゅうたに合格したか聞き、（受かったみたいだ）、1週間後のデエエルアカデミア行きのヒコーキが来るまで、デッキ調整や、荷物をまとめたりしながら、1週間を過ごした。

1週間後

アカデミア行きのヒコーキの前で十代と竜太と、青い髪の人と、地味な人に会った、丸藤 翔と、三沢 大地というらしい。

ヒコーキの中では5人で喋っていた。玲奈と喋れなく（周りの人の目が気になるので）玲奈がむくれていた。

その後、鮫島校長の話聞き、アカデミアの説明を受ける。ヘーこの服の色ってそうゆう意味があったのか。あ、俺のランクはレッド。十代たちと同じでよかったよ。

その後、レッドの寮へいく、十代や翔と同じ部屋だ。竜太とは違う部屋だ。三沢は、寮が違うし。

「ここは眺めがいいな」

オレは窓の外を見ながらそうつぶやく。窓の外は海が広がっていてきれいだ。

玲奈も横で感嘆の声を上げる。

そんな玲奈を見て前に、映画で言っていたセリフを思い出す。

「君のほうが綺麗だよ。」

やっぱカッコイイな、このセリフ。

「へ？どゆこ、へ？」

うわ？すごい動揺してるぞ。

「何って、冗談だよ、ジョーク」

「え？冗談？そうよね、あは、あはは。」

「お前ら・・・何やってんだよ」

おお、十代。そういえばお前は玲奈が見えるんだったな。

「気にすんな、十代、何か用か？」

「ん？いや、なんでもないけど？」

あ、そなの？じゃあ行きたい場所があるからついてってもらおうかな。

「十代、アカデミア中にデュエルスペースがあるんだって、行かないか？翔も。」

「おう！いいこうぜ。そこで、デュエルしようぜ！」

ああ、そういえばどっちが強いのか、デュエルしなきゃな。

「おう！どっちのほうが強いのか楽しみだぜ」

「ウワ・・・アニキと尚君、どっちのほうが強いのか楽しみだね」
うん、うん、まったくだ。

「ああ、ほんとだな！尚！翔早く行こうぜ。」

10分後

「ここは、ブルーのデュエル場だぜ。」

そのあとは、行の無駄だから早送りする。簡単にゆくと万丈目とかいう奴が来てデュエル！、かと思ったら、天上院言う奴が来てデュエルは中止になって、寮で歓迎会をしてもらい、そのあと万丈目からメールが来てアンティデュエルだとか言うからメールで言っていた時刻にデュエル場にいった。で今に至る。

「逃げ出さなかったことは褒めてやる。おい、お前、あの尚とかいう奴の相手をしてやれ」

ブルーの一人が俺の前に来る。

「さあ、お前の相手はこの俺様、モブ男　モブ太郎が相手をしてやるぜ。」

「ああ、始めるぞ。」

「デュエル！」

「先行は俺だ、ドロー！え・・・？」

何この手札？

「どうした？事故ったのかあ？ははは！」

「お、おれは手札より魔法より魔法族の里を発動。魔導戦士ブレイカーを召喚。カードを2枚セットターンエンド。」

この手札はやばい。

「俺様のターン！チッ、魔法カードを使えないのは厄介だな。おれ

は、レッドガジェットを召喚、効果で、イエローガジェットを手札に加えるぜ！カードを2枚セットターンエンドだあ！」

ガジェットってことは、伏せカードは血の代償か。

「俺のターン、トラップカードオープン。王宮のお触れ、このカード以外のトラップは無効になるぜ。

行くぞ、ブレイカーでレッドガジェットにアタック。魔法剣！」

ブレイカーが雷をまとった剣で敵を斬り裂く。

「ぐううう！！！」LP3400

「まだだ、手札から速攻魔法デイメンションマジック。魔導戦士ブレイカーをリリース。来い、玲奈。」

突然現れた氷が、くだけ、中から玲奈が現れる。

「やっと私の出番です。」

「行くぜ、玲奈でダイレクトアタック。コールド・ブリザード。さらにダイレクトアタック宣言時トラッ

プカードオープン、マジシャンズ・サークル。オレはデッキより、ブラック・マジシャン・ガールを特 殊召喚。」

「俺のデッキにはいない」

「エエエえ！なんで尚君、ブラマジガール持ってるの！？」

「・・・もらっただ。」

そう・・・もらっただ。

「ただ、誰から?!」

「内緒だな、まっ!いつか話すよ。・・・さて!」

オレは目の前に居るモブ男先輩を見る。

「終わりですね。先輩」

その声と、ともに玲奈とブラマジガールが魔法を放つ。

先輩のLPが0になる。オレは自分の右腕を空にふりあげる。

「俺の勝ちです。」

V S 万丈目の取り巻き（後書き）

エー、まず最初に謝ります。ごめんなさい。

話の最初にあるなおと玲奈の会話完全に駄文になってしまいました。後このGX もう1人の主人公はそんなに長く続かせるつもりはないので中途半端な終わり方になると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8079y/>

GX もう1人の主人公

2011年12月3日22時50分発行